

伊東森作(1897-1997)

売れる黒部西瓜をつくろう

伊東森作は、形が悪く皮が厚いため売れない黒部西瓜の状態を知り、大正 12 年、西瓜の品種改良に取り組み始めました。国内だけでなく、アメリカからも西瓜の種を取り寄せて試作を繰り返し、昭和 6 年、見た目も味もよい新黒部西瓜 1 号を開発し、大阪中央卸売市場の西瓜品評会で一等賞を受賞しました。しかし、この西瓜の栽培が難しく、とれる量も少ないためにさらなる改良が必要でした。

再び西瓜の品種改良に試行錯誤し、昭和 13 年、ついに病気に強い新黒部西瓜 7 号の開発に成功しました。市場に出すと飛ぶように売れました。



泥流しの実験

第二次世界大戦の最中、塩入松三郎博士が稲の秋落ちの研究のために黒部川扇状地で実験を行いました。実験の結果、性質の違う土を他の場所から運びいれ、元々の土壌に混ぜる「客土」が有効だとわかりました。そこで、伊東は、赤土を水に溶かして泥水として用水へ流し、水田まで運ぶ「流水客土」という方法を発案しました。

流水客土事業の実現

流水客土を黒部川扇状地に実施して食糧増産するためには、莫大な資金と政治の力が必要でした。伊東は県議会議員になり、流水客土の重要性を説明して回りました。伊東らの尽力により黒部川流水客土促進期成同盟会が結成され、ついに県の事業としての実施が決められました。

昭和 26 年から実施された流水客土により黒部川扇状地の水田は永く水を保てるようになり、冷害が減少し、客土によって鉄分が多くなったため秋落ちも少なくなり、米が多く取れるようになったのです。





カラー写真がなかった当時、絵
に描いて記録を残していた。
(絵は森作の弟 秀雄による)